

狂歌集

特別  
A5  
6590  
165



ハ5  
6590  
165



奥の如くおのゝこゝろ 久遠の世に

七  
七  
七

髪をよき髪にいとよきも細くちりて

あちよき髪にいとよきも細くちりて

六

髪をよき髪にいとよきも細くちりて

川をよき川にいとよきも細くちりて

九

このものを取せし申すもあはれ

橋本のくさくさ 穀を喰はれ 粉を喰

あひかりふと 宿のまはらむと

あまのつと 鏡のなまらむと

あまのつと 湯をたぬきむと

いづれもいふ 涙のなまらむと

外

昔のくさくさ 髪をとりけしむと

人のあまのつと 小みの子と

娘の白ひと 髪をたぬきむと

引ちあはれむと 涙をとりけしむと

あまのつと 湯をたぬきむと

いづれもいふ 涙のなまらむと

古巻 日記

細末七ノ人

あひ初し 卯たうまの 新の 原信也

うつくしき 春を ちかひ その 川 小橋

ちかきつこ ちかぬ 昔ふ 向う さまん

名をこたむ ちかきつこ おを 竹之

いよる せいら ちかきつこ ちかきつこ

こゝろ ちかきつこ 人を ねん

一 雨の ちかきつこ ちかきつこ ちかきつこ

いよる せいら ちかきつこ ちかきつこ

ちかきつこ ちかきつこ ちかきつこ

ちかきつこ ちかきつこ ちかきつこ

ちかきつこ ちかきつこ ちかきつこ

ちかきつこ ちかきつこ ちかきつこ

立ちあがりよ身をたあちりももねりて  
あちよきこまきり松の矢がけを  
つぎのころも深きひをむ杖こひひと  
いふもやけは浮きあがり矢の  
あちよきこまきり松の矢がけを  
あちよきこまきり松の矢がけを  
あちよきこまきり松の矢がけを

性

娘の市井白ひも深きいねあきけ  
川辺の時も舞いあがり  
あちよきこまきり松の矢がけを  
あちよきこまきり松の矢がけを

あちよきこまきり松の矢がけを

十番

口歌

栄のえのり

かき川の深きよ深く鮎うり

いまそを廻し一振のまじん細

あひ細し身を糸よきまをそにて

あちよきまをきくおのゑり

鮎まのし身をほ針のし原はれ

ぬくくそをそとよひそか川

七  
ほあくとわるとをそせしむ

まじりぬはれし知り身の色

六  
姫市の匂ひも深きぬはまの袖

よきしは時系録しよまのり

五  
みけらうちをぬきかきくちま

みそをむしりしつぬとのにな

いかさうりし君のなほ紫姫のうて

みのまきさくぬこひの瀬か

粘網とどろきおしおし海をた

あひひりてまきとるる

結るれそ君を釣針一ち

いとやさしさにさなをぬん

ふこのまはきき髪が枝をけり

人のめちうさいよみの魚

糸なるさけいとくれてはさるる

海くちゆるる人を恨川

口欲

夕雲伸人様

首

ふひしきに後笑ふも情らほし

かゝるあめしきまゐらう西乳お乳

世

姫いぢふ保きし髪をさうけしよるも

とけて嬉しん床のあかき

世

こひしとち平ぬるぬる伸きま

ほああしとぬる涙のこころ

三

歎つるをらむしにかへりな

身をとらむももつらあましおと

四

いとよるもれいしあはれてはとらる

あかちゆくよ人を思ふ

五

結細しおのふもねるい道はあ

あふしとれてはとらる



る  
あはれしんよ情のまきを  
女あつきの生舞のこ

あつきの

くせりて君らんをさうり  
かたにうむ本のうもつ  
北  
あつきの人目りあまの原風も  
あつきのをさるあまの床

外  
あつきのあまのまやあつきの  
あつきの君をさるあまの川

三  
あつきの君をさるあまの浦少  
あつきのあまのあつきの

四  
あつきのあまのあつきの  
あつきのあまのあつきの

ちりぬがさるるみの沖のこころね  
ほろろとこころをなほしん

追分

あふねとくひろくをいぢりやみ  
くさくの浦にみるるをいして

追分

ゆきふりてはなはたかきよき

ひらきとつけのあめつら

やあふらるるのこころをいして

こころをいしてはなはたかきよき

あふねとくひろくをいぢりやみ

ゆきふりてはなはたかきよき

あふねとくひろくをいぢりやみ

あふねとくひろくをいぢりやみ

袖のそとに田母おんてあし  
い糸中ふし一おのりのりあ  
林風を遠く山をほらひま  
と山の中をのりし吹るり  
まちをよなほのあかりは  
きしほりし風の流し

まふま

川  
君ゆく一おのりのあし  
一のりし一のりし  
答一しした細と好し  
きしし一おのりのあし  
おのりのあし  
おのりのあし  
おのりのあし  
おのりのあし  
おのりのあし

高き山を登りて  
ちりぬの上るる  
来て侍し  
行り立ちし

題 為 國 名 述 一 山

身一きし  
山とありあし

山の高き山を登りて

山の高き山を登りて

山の高き山を登りて

山の高き山を登りて

アヲ土ニシテトクニシテ入テカク  
カクニシテトクニシテ入テカク

村ニシテ水袖ニカクニシテカク  
カクニシテ水袖ニカクニシテカク

浮遊ニシテカクニシテカク  
カクニシテ浮遊ニシテカク

石貝の果ニシテカクニシテカク  
カクニシテ石貝の果ニシテカク

昨旦ノ一ツ貝ノ一ツとカクニシテカク  
カクニシテ昨旦ノ一ツ貝ノ一ツとカク

君ゆへニカクニシテカク  
カクニシテ君ゆへニカクニシテカク

幸の山ノカクニシテカク  
カクニシテ幸の山ノカクニシテカク

美の山ノカクニシテカク  
カクニシテ美の山ノカクニシテカク

大いなるおぼろしくしてきく事  
にあらまして おぼろしく ぼろり代  
さかふ天のうき山うねい  
踏ぬるをいふ止送るもむ  
を川きこくと海隔りくるはれ  
いくし程のまん 遠ゆめの  
すかる

臨加

きりて

少くともまゝしてさやからる  
その おぼろしく 山をうきうきや 崎り  
遠き おぼろしく 山をうきうきの 崎り  
まの 遠舟い 東入ら 崎り  
清上よりいふなり 破世より  
お大いなる事 けり 崎り 崎り  
崎り 崎り 崎り 崎り 崎り  
かけそのもみし川のはれ 崎り  
まの 崎り 崎り 崎り 崎り

右條科い述懐して御外を  
川あよら座してえり針おいと  
まうすわねあきふりすきく只  
うちをなまじり長ろり奇うり

室多入付後のまね二男まはりの  
人のあをそはまのふと祝をせて

よとあかぬたのいあまきわらねん  
いやあああくまそくくーまこ初枝

あま山より海をいのねと  
えはらふ指しはらけりて身の上  
ちりーいあり

うき知しえまのふねの指しり  
おき川見りも海をえとひし

海とくしあはれもたはらあはれ

松

<sup>まをる</sup> ちんをまをてあけてまをるあはれんをま  
つありゆを伊川のゆす

<sup>まをる</sup> 舟や浪のうかへまをる

人まぬひし程まをる松

51  
屋くまのねんしんまをる

まをるのまをるまをる

まのまをるおとこのまをる

まのまをるまをる

まのまをるまをる

まのまをるまをる



阿ふるれし一母つあつて其のよもねと  
あつよよもつてほろぬゆかの  
麻糸のつらつし一尾のこもねや  
いくよあさしぬあいあひのね  
よもろく一後のよろきれあともつり  
あつつりつりしとひつり  
庫のふらをたうけてくもさねし  
いとらほねと一それきりてき

まねねし一んや一君のねし  
いとらほねと一それきりてき  
糸のつらつし一尾のこもねや  
あつよよもつてほろぬゆかの  
麻糸のつらつし一尾のこもねや  
いくよあさしぬあいあひのね  
よもろく一後のよろきれあともつり  
あつつりつりしとひつり  
庫のふらをたうけてくもさねし  
いとらほねと一それきりてき



まゝのせりしとをきかへて松をうり

むのひのまを志す人そあま

よふ人たぬとあつと侍りし

みしうさむきし藤原よ松の事

まゝあてく目し名を法印山

一のひあか松たをまみち

松原あつとあままのせ

かけたふあまあつとあまのせ

あまあつとあまあつとあま

松のくうよふと世むとまのせに

こゝろを法むとあまのせ

あまのせあまのせあまのせ

あまのせあまのせあまのせ

あまのせあまのせあまのせ

あまのせあまのせあまのせ

あまのせあまのせあまのせ

苗代

<sup>巻首</sup>  
 ちりまきふけまきだての体は  
 ありし 地あはれ苗代  
 苗代をなむの母ももや  
 君やーみるのよきをええ  
 君をともむ地もあれい蘇るけり  
 を我もんごころよきなり

切らぬ

<sup>巻首</sup>  
 君かあきり人の影として  
 月のはらばりかきかゝる  
<sup>統</sup>  
 三束の影のいよき舟十たれ  
 君やそやのあきともの  
<sup>小</sup>  
 是くハ業はとく三井寺や  
 何ぞ石山 秋をふり  
<sup>二</sup>  
 君のいよき流き集り  
 おのけし人を向し秋  
<sup>四</sup>  
 名をぬねをかきし  
 いまもて河の原とわり



二二二  
江上柳 春山月夜

かたらのむねの柳 花はさきて清かり

ら 花はさきて清かり

うその入はさかるともさくともさかるとも

さくともさかるともさくともさくともさくとも

花のあはれとての政とておもしろ

あはれとての政とておもしろ

人へのあはれとての政とておもしろ

あはれとての政とておもしろ

あはれとての政とておもしろ

あはれとての政とておもしろ

あはれとての政とておもしろ

あはれとての政とておもしろ

あはれとての政とておもしろ

あはれとての政とておもしろ

花咲くはるもつらぬあの日

藤とらちをうらむあつた山城

折竹とえみかたのをあけさす母

うたふさいふをうらむあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

あつた山城のうたをあつた山城

おふのも能く一かゝるにきくちう

うらむをせむか舟五の山 せ道

<sup>うら</sup>え信り事あるかくる居る事あり

後多山の平らうれねのちありた 西道

木の戸もよきれ口は後事か顔

月とある舟とあるぬきに 後

将らうとある舟とある 後

いろやしたる舟とある 舟

一舟 舟

<sup>軸</sup>

美事のか看板をわ 舟

<sup>舟</sup>川 舟

志事ありと柄 舟

事ありと柄 舟

寺改二の 舟

とある舟 舟

舟 舟





あつしけん二人のちひさしきとゆふにま

うもてそれゆふまのまふ年なはほぼ

まほふより終るやぐむほふ

子代終るえのもれりよりほふを

らむあふやあふにまたるふあ終の

十 相ふられあふゆふけりあふ大あふ

あふあふあふあふあふあふあふあふ

十一 一あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふ

十二 やあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふ

十三 あふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふ

十四 あふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふ

あはれをうけの久りも成りあはる  
まゝのうらや一むれ松 初  
居り代ら子代り 父老は後藤  
をうらやうてや生ひ成りしん人  
あはれもあはれ集後よひたて  
あはれをうらやうてや生ひ成りしん人  
あはれをうらやうてや生ひ成りしん人  
あはれをうらやうてや生ひ成りしん人  
あはれをうらやうてや生ひ成りしん人

流石な木 杖の月 粟

雁 奇 回 遊 小川氏撰

例と困むまのうらやあはれ  
まゝのうらや一むれ松 初  
酒好

山のあはれあはれし  
あはれをうらやうてや生ひ成りしん人  
酒好

谷川 山幅をうらやうてや生ひ成りしん人  
酒好

何し風をよきと傳へしに

ハ 舞の如きも川よこせり 志也

まらして暮に北川よ 秋の山は

鳥 ちかき風にして 紅葉いぬめ 下は

をちかき風にして 紅葉いぬめ

九 秋をわけて 谷のあつし 志也

ふもあまの秋を傳へて 紅葉いぬめ

志也 ちかき風にして 川よこせり 志也

かた川に流るるの末に 紅葉いぬめ

十四 秋や果をいささかいんむ 舞也

谷川を流るるの末に 紅葉いぬめ

己 秋の末の風をいささかいんむ 酒也

秋の夜の目の後や 紅葉いぬめ

ハ ちかき風にして 紅葉いぬめ 志也

ふもあまの秋を傳へて 紅葉いぬめ

鳥 秋の末の風をいささかいんむ 舞也

そらうらく後のやー 舟渡り

十六

みくをきくしる 林の夜つ月

七五 辰 遊松

その流風の荒れし命しや

四

舟のしりしきつら月

梅子

角のあまをさうはしと 院川

五廿

とまききしつら 林の夜つ月

下五 辰

林のあまをさうはしと 水あて

七

舟のしりしきつら 月

暖 蓬

舟のあまをさうはしと 舟の夜つ月

八

しんらみのあまをさうはしと 舟の夜つ月

舟 辰

舟のあまをさうはしと 舟の夜つ月

十八

かけをさうはしと 舟の夜つ月

梅子

舟のあまをさうはしと 舟の夜つ月

十七

舟のあまをさうはしと 舟の夜つ月

下五 辰

舟のあまをさうはしと 舟の夜つ月

十一

舟のあまをさうはしと 舟の夜つ月

二十

五

枯るるの如くしきなきらりすに  
さうもあつしきなきらりすに  
きりあつしきなきらりすに

八

おきりてよおれぬの如く  
山越してはかんにあつしきの如く

十三

門の如くおきりてはかんにあつしきの如く  
おきりてはかんにあつしきの如く

十

おきりてはかんにあつしきの如く  
おきりてはかんにあつしきの如く

五

或士の如くおきりてはかんにあつしきの如く  
月の如くおきりてはかんにあつしきの如く

十九

おきりてはかんにあつしきの如く  
おきりてはかんにあつしきの如く

五

おきりてはかんにあつしきの如く  
おきりてはかんにあつしきの如く

八

おきりてはかんにあつしきの如く  
おきりてはかんにあつしきの如く



二 きりの人今このうき世に愛しむにありて

深き心ありてはさしと社より水も流る

四 あらうに便しありてさしこの将よ

かちて乾くゆきまじりの他三つに

五 物の今れも事業もまじりて向の

まじりて影ありては達人ともあう人

六 おもておれ此のまじりてあう人

海織りうし布り色紙 下巻

七 時移りてさこのおれの恥はにり

徳とんきとてからすうしうし 梅子

八 物へのあみかきせとも秋果の

まじりてあみかきせとも秋果の

九 村々のいほり風あきとれ

さしに秋果のまじりて 暖風

十 川をらん移ていはらみり

梅子



十一  
 高のけまよやうるまゆ居り  
 そり福あるもくしうくやある  
 ありき山のいふく歌にけま居り  
 ひくさわいりてまあいら果  
 いほくたゆてまあよりけまの  
 夜をくはむりよ衣うりま  
 十二  
 三ちやのねまの居まわし  
 木のくしうもくしうくま居り  
 木のくしうくしうくま居り  
 木のくしうくしうくま居り  
 十三  
 ありけいけいけいけいけいけい

十六  
 この改ちを居りまよ居り  
 居りけいけいけいけいけい

題名併 梅 安産 光 中世 前氏 撰

十七  
 まるれいおのくすまの居り  
 歌のまもくしうくま居り  
 ぐりいけいけいけいけいけい  
 梅  
 神もくしうくま居り  
 切のあおのひか居り

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

何れも持もそれり来らんぬれ  
ゆた〜のおひきとてあま  
酒好

身婦さふをかりしとてあはれは

せきとのまじしみの深きをまはる

死 常の糸のきく糸もさきと

栞くちあはれはとまのひりの

凡 くれとまのあはれをわらぬをま

そこのまをまはるく白く栞う

右同 死まのり栞撰

とる まんのあ氷の道のとけとこる

むうのまじしやの栞う

山にまはるとしりひり栞房

山の上し中流 暮る

まのあつの新しきまはる

まのあつの新しきまはる

まのあつの新しきまはる

まのあつの新しきまはる

まのあつの新しきまはる

まのあつの新しきまはる

まのあつの新しきまはる

まのあつの新しきまはる

人 地 天

歌よきいふくしむふらひの入り  
人志ぬはらむしむひのゆし、  
こりしむらむらあむひの程うし  
まじしはらむのうちまは娘しし  
人  
庭はもほやむらこほやゆし  
おまののこつなまのしし生  
はる  
くしし山てくしし下し物ぶつまの  
いほの味みかかかかそわを程  
おもをぬとむりれの上をす  
おろ陽ししもまの木のあへん人

題

流の紅葉 秋の月 原 栗 赤白恋  
紅かり柑撰

古尾  
二十

紅を赤ちる河を流り大橋ふ  
まのの娘の織りしとそえん  
外しし指もさそやあ害ふ  
こましむあうてなす練あ  
林うやのこそくうけの本末  
あひしあれそなすい習あ

丈夫のり後のいまをともけし

みちあうしふあまし

まきん

林うせり吹あしきれし梅香

あまもつむとをさうの山た 梅香

り林あり雪こよりてや林の川

こころのあしきはれそあぬぬ

おし月もあしれをゆてうの雪

松をくしきよのををさる 雪丸

雪のよれ月のこと文やみかむ

かろしをゆあさるのあま 雪丸

も弱女のまことの代がれつら

目やれ後のかて文の茶 雪丸

園原の山あり木城しみるさや

うささの身のそ月ののり解 梅香

桂ゆかり諸上はらそらむさ

もちのあまゆいさひも何り 雪丸

庭名しつさあしり下向の

ふみつけてはをさる 雪丸

生輝の香しおらそぬとら

流つれ名のま何しあけ 雪丸



わきののよみけいけいありてたけのりつと

徳くみ氷のとりけきつるあり

よひしむちちむに豆のたけふ

いしやふさくて鬼のかけん

山阿そ栲のいしむあり

たつを村のいしむあり

上ふの月をさめし備へむと

えりむいしむあり

おとせの境板もいしむを

福をもちと降てうり

酒好

蜜花

酒好

栲也

酒好

遠く衣はらこりいしむを

あまのいしむあり

海橋のいしむあり

わしむあり

あしこもえんるいしむあり

あしこもえんるいしむあり

あしこもえんるいしむあり

あしこもえんるいしむあり

あしこもえんるいしむあり

あしこもえんるいしむあり

人

人

人

栲也

人

勇 仁 智

わらう端りしおゆおる

くおら氷のこらあさる 西好

節ふの宛さる電しすくさや 以風

さよ。懐ぬぬる赤燭ても 以風

快るのゆを何さあめあて 西好

いさきも厚くいさる米ハ 西好

兒たさるちをひても賣てある 勇

楸もやうふ夏板もなし 勇

右ち改三原ゆま 於高代巻 赤麻呂ま権卜者

右同 山川氏撰

十六番

鬼たまはたさるひく入ある 勇

楸もやうふ夏板もなし 勇

節りけ白くあるあ入りんし 西好

あしあめいけりさるん 西好

鞠のこしあさるをひくすある

個うあらあああああああ

鬼ああああああああああ

あああああああああああ





二

清も秋も冬も春もを朽ちて  
氷も春も夏も秋も冬も  
氷も春も夏も秋も冬も

油

不二の根のまきやうたあさのまき  
おつるまきやうたあさのまき

花

おまきまきやうたあさのまき  
つけり花もあさのまき

歌王所

金谷の所へお遊ば 樹あうた  
松井氏

まきやうたあさのまき  
おまきやうたあさのまき

う

おまきやうたあさのまき  
おまきやうたあさのまき

待と遊ば 山崎集

右同

なけあしとまきやうたあさのまき  
おまきやうたあさのまき

後地

まきやうたあさのまき  
おまきやうたあさのまき

待と天

おまきやうたあさのまき  
おまきやうたあさのまき

待と人

おまきやうたあさのまき  
おまきやうたあさのまき











うめのあふけやうきんたむを  
 やうきんたむあふけやうきん  
 おろけいさかきつらきん  
 せちありれねをきつらきん  
 えしあふけやうきんたむ  
 うしあふけやうきんたむ  
 投用のあふけやうきんたむ  
 びらきつらきんたむ  
 ぶらきつらきんたむ  
 ぶらきつらきんたむ  
 ぶらきつらきんたむ

おろけいさかきつらきん  
 やうきんたむあふけやうきん  
 おろけいさかきつらきん  
 せちありれねをきつらきん  
 えしあふけやうきんたむ  
 うしあふけやうきんたむ  
 投用のあふけやうきんたむ  
 びらきつらきんたむ  
 ぶらきつらきんたむ  
 ぶらきつらきんたむ  
 ぶらきつらきんたむ



石の上なる海かみき理の子合せれ  
わけのさへぬゝさうしきふりぬ 定光

久遠の徳 芳きもよ 小川氏撰

夕さくら社の先もとらゆらち  
ふりり 語ももく 海うせ 多光  
思ふをいあしむ 流して 衣川  
と舟をとりく 夕さくら 舟  
舟ももさくか 舟もも 舟  
海をいけ 舟もも 舟もも 舟もも  
酒好

秋さくら 舟もも 舟もも 舟もも

あつとら 舟もも 舟もも 舟もも 舟もも

舟もも 舟もも 舟もも 舟もも 舟もも

舟もも 舟もも 舟もも 舟もも 舟もも

舟もも 舟もも 舟もも 舟もも 舟もも

舟もも 舟もも 舟もも 舟もも 舟もも

舟もも 舟もも 舟もも 舟もも 舟もも

舟もも 舟もも 舟もも 舟もも 舟もも

舟もも 舟もも 舟もも 舟もも 舟もも

おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり

ほり

ゆり

ほり

ゆり

ほり

くまの雨をえまきに及ばり  
ひとまのねり人をあつめて  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり  
おのゝみまのほりゆり

えり

ゆり

ほり

ゆり

右の列

紅糸の術選

こゝろく此に集るるをしりたるは  
ゆりあしとていふ事をもしむまを  
三つ命ものきくは人まあつた  
いうまのこゝろのさちあつたり  
たぬのしりていふ事をもし  
さしとていふ事をもし  
こゝろく此に集るるをしりたるは  
ゆりあしとていふ事をもしむまを  
三つ命ものきくは人まあつた  
いうまのこゝろのさちあつたり  
たぬのしりていふ事をもし  
さしとていふ事をもし

ほね  
定也  
人  
ほね  
定也

まぬより此集るるをしりたるは  
あしとていふ事をもしむまを  
三つ命ものきくは人まあつた  
いうまのこゝろのさちあつたり  
たぬのしりていふ事をもし  
さしとていふ事をもし  
こゝろく此に集るるをしりたるは  
ゆりあしとていふ事をもしむまを  
三つ命ものきくは人まあつた  
いうまのこゝろのさちあつたり  
たぬのしりていふ事をもし  
さしとていふ事をもし

術也  
人  
ほね  
定也

つゆりのちもこはの沖に燈一  
あまのあまのりくまの雨 陽基

余言の舟宮奉納集 江奈の樹邊

題市代佐又叶 掌の冠福川忠

天 地 人

光るるこも此れはててこももを子成代  
うりのすこもさうさうの 國 酒好  
阿伽楠のあさすてよとこりらの  
経とよむてようかおのりまを  
帯ぬくのむいようまつ 葉を此  
野しけし玉のこころん 梅ち

かぬぬぬ代もあらる 祿徳佛

三光鼎のあー糸の 玉 人

秋とこめてあまれも 掌のまを 酒好

まのの左のたましむも 殿し 奥と瓦

祿このもの播きくさふとあまぬ

扇さるはり川のつゆさつじより

連城の珠とあまのる 掌のま 梅ち

まを天下れをまの 宮大の 太

君り代をさあふ 糸かろ梅ち

ねんりの書 呉舟の 笛

三條 延永の 中

三つ風を死んでわあうむせふ  
くさふあられらるれば呷と西行の  
狂成

下ハあふらぬ

吹く声一実をふりてしどはの  
文一あふらるる席を侍りたるに  
未だ相

辰の八月一めごさるるを

題 御原 海 壽 寺 為 志 此 系 の 相 撰

天  
さくさくといふ林のこころとちあうちよ  
おちてををともくく初のはは酒好

### 地 人

冬はしもの果るくういさもさるる出

ひめあのしら舞もやんとむまの

佛このしもの中 中 人

はしつちしむは悟つるをいふ

そそくしんふしあこの下を

いくせり君よんをうけしこと

十にほのをいひしこと  
う解らうつれわを川原の夕すし  
はあつさまをうけしあいらい

人  
人  
を  
久

三伏のまじしあひらふかしの  
なまこいさぎりの花のまじま  
酒好

さよ姫のまろ浦の海よりあは  
かろ名とらるる後のふれ  
人

まろののちしよ花よりあは  
ちしよ花よりあは  
まを

よのちしよあは  
吹は  
竹丸  
玉の  
酒好

よのちしよあは  
吹は  
竹丸  
玉の  
酒好

よのちしよあは  
吹は  
竹丸  
玉の  
酒好

よのちしよあは  
吹は  
竹丸  
玉の  
酒好

よのちしよあは  
吹は  
竹丸  
玉の  
酒好

大尾

右回紙 菅氏撰

以

軸

右田は夏の日海し日の舟し出て  
 さやうに清くは遊樂し是は通曉もを  
 月ととんお金を所しをりけりて  
 河のあちそり多清する  
 志目録しけても果をうし海の  
 そりくはくもあはらふ  
 吾のたのぶさいあつといひまふ  
 むきぬの舟りあつてわらそ  
 矣哉

酒好

酒會

馬の道の心をとほしはあはれ  
 みらぬのきまふしんり  
 おやうやいそりのけあはら  
 吹ちししおのきり風  
 一ちゆいあひはりるは海鳥の  
 かしけいのもこいふまね  
 伊はえもり哉さう極をの  
 清のそたのとりとけりち  
 振細流りかきと掃しきんぬ  
 和しねのなをほはまら

酒會

竹也

酒會

多美

うきをきくまひけねといふまじに  
人さうしといふまじに  
何のほのねのまはるる船もせて  
はるる船もせて  
ねをこいねもせて  
あさといふまじに  
えん

三十一



